

2025年度

成城大学大学院文学研究科主催 学術講演会

「霊媒」のエクリチュール — ニーチェ, リルケ, ムーゼル

2025年11月13日(木)

成城大学3号館1階 312教室 16:30 - 18:00

演者 ^{ひらの}平野 ^{よしひこ}嘉彦 氏 (東京大学名誉教授)

専門分野は、近代ドイツ文学、ドイツ思想史。東京大学大学院人文社会系研究科教授を務め、2007年に定年退職。著書に『マゾッホという思想』（青土社）、『死のミメシス — ベンヤミンとゲオルゲ・クライス』（岩波書店）、『ボヘミアの儀式殺人 — フロイト、クラウス、カフカ』（平凡社）、『土地の名前、どこにもない場所としての — ツェラーンのアウシュヴィッツ、ベルリン、ウクライナ』（法政大学出版局）などがある。

ご参加について

参加をご希望の方は、11/11(火)までに以下の事前申請フォームよりお申込みください。

- * 講演中の写真撮影、録音は固くお断りいたします。
- * 未就学児の入場はご遠慮ください。

▶ <https://forms.gle/bpUCuAHH8Y3sC8Mp8>



開催趣旨

ほぼ1880年から1930年まで、美術史から転用されたエポック概念で「古典的近代」と呼ばれる時期に、ドイツ語圏で心靈思想ないし超心理学が、理論および実践の両面において、たとえば交霊会といった形式を通じて、展開された。そこには霊媒の存在が不可欠であったことから、「霊媒思想」という呼称もある。それと期をおなじくして、ドイツ語文学にあっては、直接の影響か、あるいは単なる同時代的現象と見做すべきか、それはともかくとして、作者ないし登場人物がみずから霊媒の役目を果たしている、「霊媒のエクリチュール」とでも形容すべき構造が散見される。19世紀のロマン派詩人のクレメンス・ブレンターノやユスティーヌス・ケルナーの著作にも遡行しつつ、ここではなかでもフリードリヒ・ニーチェ、ライナー・マリーア・リルケ、ローベルト・ムーゼルの事例をてがかりに、この時代の思想がどのような境位にあったのかを考えてみたい。

